

第42回大会 2009.8.10~8.11

会場；国立オリンピック記念青少年総合センター

8月10日（月曜日）

○ 開会式（10時00分～10時10分）研究会会長挨拶、大会オリエンテーション

【10:10～11:50】

A-1 「聴覚障害児の評価と指導」

東京学芸大学 澤 隆 史

聴覚障害は「見えにくい」障害と言われることがあり、その困難に敏感であることが聴覚障害児の指導では求められます。この講義では、オージオグラムの見方などの基礎知識に加え、聴覚障害児の言語、社会性などに関する発達上の課題について解説し、支援を行う上での基本的なあり方について述べます。

B-1 「吃音児の理解と支援の実際」

金沢大学 小林 宏 明

吃音がある子どもは、うまく話せないという言語症状面の問題に加えて、言語・認知・運動発達や情緒面の脆弱性の問題、吃音への不安や自己肯定感の低下などの心理的問題、吃音に対する周囲の叱責やからかい等の環境の問題等の様々な困難を抱えています。本講座では、これらの概略について解説すると共に、これらに対する対応を含めた包括的な指導・支援方法の提案をしたいと思います。

C-1 「子どもを見る目・育てる心」

東京学芸大学名誉教授 谷 俊 治

言語臨床に携わるようになってから半世紀を過ぎました。この間、医学部付属病院での音声外来、教育学部での臨床授業や教育相談、福祉施設でのカウンセリングなどで、多岐にわたる事例から多くのことを学びとることができたのです。これらの体験とその間に得られた学問的知識をもとに、言語障害児教育に関する私自身の考えを述べてみることにします。

【13:10～14:50】

A-2 「吃音の基礎知識と新たな視点」

東京学芸大学 伊藤 友彦

吃音症状がある子どもたちが豊かな学校生活をおくるためには、教師、保護者をはじめ、周囲の人々が吃音について、これまでの研究成果をふまえた、できるだけ正確な知識をもっていることが必要です。この講義では、吃音の基礎知識と最新の知見をわかりやすく紹介し、従来の研究成果をふまえた言語臨床のありかたと、発話の流暢性を促す指導のポイントについて述べます。

B-2 「言語発達遅滞の指導の実際」

東京学芸大学 大伴 潔

本講座では、「語彙を育てる」「文を構成する」「文章で表現する」「効果的に伝える」といった言語領域の発達過程を概観しながら、適切な支援目標の立案と、興味を持たせる課題を通じた支援について考えていきます。言語評価法の例として「LCスケール」を取り上げ目標設定のあり方を考えるとともに、言語発達支援の効果的なアプローチについて検討します。

C-2 「事例検討の意義と進め方」

目白大学 羽田 紘一

言語障害児の指導を効果的に行うには、指導者の子どもの問題の理解の仕方、指導の方法・結果を定期的に検証しながら進める必要があります。その検証の方法として、“事例検討・事例研究”を行うことが有効であると言われていています。今回は、演者が提出する事例に基づいて、「短縮事例法」という実際的な手法を紹介し演習を行います。参加者の体験を生かした実りある時間にしたいと思います。

【15:10～16:50】

A-3 「言語発達遅滞の評価と指導」

東京学芸大学 藤野 博

言語発達遅滞には、知的障害や自閉症スペクトラムを背景とする場合や、音声言語のみに顕著な問題を示す特異的言語発達障害(SLI)などいくつかのタイプがあります。本講義では「聞く・話す」ことに困難を抱えるタイプのLDの基本障害として近年注目されている特異的言語発達障害と、自閉症スペクトラムにおける会話やコミュニケーションの問題に焦点を当て、評価と指導のポイントを概説します。

B-3 「聴覚障害児の指導の実際」

千葉県立千葉聾学校 田原 佳子

いくつかの事例を取り上げながら、聴覚障害児の通常学級での生き生きとした姿を目指した直接的指導・支援及び間接的指導・支援を共に探ります。日記指導等による言語力を育てる学習、自由会話によるコミュニケーション能力を高める学習、「きこえにくさ」についての話し合い、仲間づくり、自らクラスメイトに発信する難聴理解授業を通じた自己肯定感を高めていく活動、情報保障等を紹介します。

C-3 「検査法の活用について」

國學院大学幼児教育専門学校 石川 清明

コミュニケーションに障がいのある子どもの教育的診断や、指導を行う際に利用されている「標準検査」の中から知能検査、標準純音聴力検査並びに数種の発達質問紙を取り上げます。検査の意義や得られた結果が何を指し示しているか、言語指導や母親を対象にした相談の場面で「検査」をどの様に活用したかなどについて、事例を紹介しながら理解を深めます。

8月11日(火曜日)

【9:20~11:00】

A-4「発達障害児の個別指導計画」

東京学芸大学 橋本 創一

発達障害児の教育支援と個別指導計画について概説します。言語コミュニケーション支援、学習支援、行動支援などのためのアセスメントの視点(言語・認知発達のみならず、学習到達評価、行動上の支援ニーズなど)と障害特性に応じた具体的な支援方法・指導プログラム(状況認知と談話指導、SST、学習支援の工夫)を事例的に紹介します。通常学級における適応と般化を目指した支援例を考えます。

B-4「側音化構音・口蓋化構音の指導Ⅰ～歪み音の理解と聞き取り」

昭和大学歯学部口腔リハビリテーション科 山下 夕香里

側音化構音や口蓋化構音は歪み音なので慣れていないと聞き取りが難しく、現場で悩まれる先生方が多いのが現状です。いろいろな子どもの側音化構音や口蓋化構音を動画で紹介しながら評価法について解説します。聞き取りのポイントや舌の動きの観察法なども紹介しますので、はじめての先生方も是非ご参加ください。

C-4「発達性dyslexia(発達性読み書き障害)の評価と支援」

筑波大学 宇野 彰

発達性dyslexiaは直訳すると「読み障害」ですが、国際dyslexia協会の定義にあるように、書字にも問題が生じることから日本語では「発達性読み書き障害」と呼ばれています。本講座では、ひらがなやカタカナを習得するのに必要な要素的な認知機能だけでなく、漢字の音読力と書字力に必要な能力の違いについて学び、書いて覚える方法が有効でない児童についてお話します。

【11:20~13:00】

A-5「構音障害児の評価と指導」

西東京市立保谷小学校 中村 勝則

例えば「さ」の音は、どのように発音されるのでしょうか。「さ」の音が上手く言えずに困っている子どもは、どのように間違えているのでしょうか。その間違いはどうして起こるのでしょうか。そして、どのように「さ」の音を出すための支援をすればよいのでしょうか。具体的な発音をいくつか取り上げながら、これらの疑問に皆さんと一緒に答えを見出していきたいと思えます。

B-5「側音化構音・口蓋化構音の指導Ⅱ～舌のトレーニング法の紹介」

昭和大学歯学部口腔リハビリテーション科 山下 夕香里

側音化構音や口蓋化構音のお子さんは、発音時に舌の奥がもりあがったり、細長く緊張したりします。そこでこの指導に先だって、舌を平らに保つこと、舌の横の筋肉や舌先のコントロール性を高める指導を行います。お口の体操をさらに進めた舌のトレーニング法についてお話したいと思えます。実際に体験していただきたいので、鏡をご用意ください。

C-5「障害幼児の指導について」

國學院大学幼児教育専門学校 野本 茂夫

障害幼児の支援について、生活や遊びを通して発達を促す幼児期にふさわしい経験の在り方を考えます。コミュニケーションに障害のある子どもを対象に、幼児教育の基本を踏まえて、生活や遊びを通じた支援の重要性を事例を基に明らかにします。障害のある幼児の自らの育つ力が生かされる保護者とのかかわり、先生とのかかわり、友達とのかかわり、環境とのかかわりをビデオ映像を交え解説する。

記念講演 【14:10~16:10】

講師 長澤 泰子(日本橋学館大学)

演題 「吃音臨床の歴史的経緯と今後の課題」

ギリシャ時代から問題にされている吃音に対する考え方は、20~21世紀にかけて大きな変革を遂げました。

臨床の基礎となる科学研究の結果や社会の考え方の変化を含め、吃音臨床の歴史を概観します。年齢により対処法が異なることを考えれば、日本における吃音臨床は、「言語聴覚士」が活躍している現在も、ことばの教室の役割は非常に重要です。学童期を中心に、今後の課題を考えようと思えます。

講師略歴(日本橋学館大学HPより)

1970年 東京大学大学院医学系研究科保健学専攻博士課程修了

1970年 東京都心身障害者福祉センター 聴覚言語障害科 言語主任

1972年 国立特殊教育総合研究所 聴覚言語障害教育研究部 言語障害教育研究室長

1990年 広島大学教授 学校教育学部

1997年 広島大学学校教育学部附属障害児教育実践センター長(併任)

1999年 慶應義塾大学教授(文学部人間関係学科心理学専攻)

2001年 日本橋学館大学教授 人文経営学部

・言語発達障害研究会会長

・ことばの臨床教育研究会代表